

今日は

明日の

前の
日

犬養道子

前の日

明日の

今日は

犬養道子

著者紹介

犬養道子（いぬかい みちこ）

1921年東京に生まれる。5・15事件で凶弾に倒れた犬養木堂翁の孫、元法相犬養健氏の長女。女子学習院を経て津田英学塾に学び、1948年奨学資金をえて渡米、ボストンのレジス・カレッジに学ぶ。1952年オランダに渡りネーデルランド放送局の客員となる。1954年フランスに行きパリソリック大学で哲学と神学とくに聖書学を専攻。ヨーロッパ各地及びパレスチナと東アフリカを歴訪、1957年帰国。1965年ハーバード大学研究室員、レジス・カレッジ名誉法学博士号を受ける。1970年西独に招かれ、ドイツ放送で活躍。現在パリ市内に居を構え、文筆、講演などで活躍中。

著書『お嬢さん放浪記』『あなたは間違っている』『初めに終りを想う』『私のヨーロッパ』『私のアメリカ』『暮しの中の日本探検』『女が外に出るとき』『花々と星々と』『旧約聖書物語』『新約聖書物語』『ラインの河辺』『セーヌ左岸で』『西欧の顔を求めて』『男対女』等。

今日は明日の前の日

©1977

昭和52年 2月5日初版

昭和52年 3月1日再版

検印廃止

著者 犬養道子

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2丁目1番地 振替 東京2-34

目 次

同文異語

差別と区別

再び言葉について

外国語学ぶべし

未来への単位(一)

未来への単位(二)

自由と広告

冷えるエリゼエ

一枚の切符

消費大国ニッポン

一枚のビフテキ

7

22

36

50

65

79

89

103

118

132

147

レストランにて

日本よ、大志を抱け

SOS

ひとりの日本人

国の防衛

人間関係―住をめぐって

人間関係―母と子その他

風土と住まい

あすをつくる養子制

「一杯のスプーン」その後

あとがき

162

176

190

204

218

232

246

261

275

290

305

カ
パ
ー
・
イ
ラ
ス
ト

装
幀

辰 田

巳 中

四 一

郎 光

今日は明日の前の日

同文異語

もう二年余りも前のことになるが、それまで未公開の中国古美術品がパリに来て、大々的な展覽が催された。

毎日大へんな数の見物人で、学生などの団体も（パリにめずらしく）特別バスでやって来るほどであった。なるべくすいていそうな目と時間をえらんで出かけたのに、ひとつの部屋から次の部屋に動くためには列に並んでしばらく待たねばならなかった。

何ともやりきれぬ、失望とも口惜しさともつかぬ思いを味わわせられたのは、列に並んだそのときであった。私の前後左右に立っていたのはおそらくパリ美大の学生連中と思われる、元氣な若者たちだったが、いっこうに前に進まない行列に並ぶ所在なさからか、ふとみつけた東洋人の私に、いきなりひとりが展覽陳列品カタログ（それは当然、フランス語で書かれていた）のページを示しながら、たずねて来た。

「この発掘品はとてもすばらしかったが、ここに書いてある（その品の発掘された）地名が、どのへんを指すのかよくわかりません。説明して頂けませんか」

それ、おいでなすった、と私はギクリとした。どうぞたずねられませんように、聞かれませんか、と、内心、願っていたことであつたから。

そもそも会場に入つたときから、私は自分自身に——と言うより、過去、かなりやつたつもの中国大陸の歴史や美術もろもろの勉強の「何の役にも立たない」ことに、すこぶる腹を立てていたのである。なぜと言うに、ヨーロッパにおいての展覧である以上、中国の品々の発掘された所や時代（そのときの帝王名を含め）一切が、中国読み、ローマ字で書かれており、非常に有名な場所や時代や、想像力を駆使すれば何とか見当のつく地名時代名を別にすれば、私には皆目わからなかつたからである。

私たち日本人は、つねに、日本語読みで、中国の地名・人名その他一切を読むよう訓練されてしまつてゐる。なまじ同文だから、それが出来るのである。

一般読者にわかりやすい、最もかんたんな例をここに出して説明してみよう。

（北京、上海、青島などは例外ちゅうの例外で、これは中国音のとおり、習つて来たからよろしい）

蘇州は、日本風には「そしゅう」と読む。われわれは「そしゅう」と読んで、それで十分だと思ひこんでゐる。ところが蘇州の中国風発音は Soochow である。逆に言うと、英文（独・仏等

等)においては *Soo-chaw* としか書かれない。したがって、*Soo-chaw* のローマ字を見た日本人は、そのローマ字をもう一度、「蘇州」と言う文字と音に翻訳して考えなければならぬのである。

蘇州はどこたんなら、それでも話はまだ、やさしい。何とか見当がつく。しかし——

Cheing, Szechwan, Kweichow, Angongchi, Hou-chia-chuang, 人名では Wu P'ei-fu などとなつて来ると、何のことやら、もとの漢字は何なのやら、見当のつくどころではない。ノートに写して家にもち帰ってしらべると言つたつて、日本語の(つまり日本製の)地図や古代史表や人名事典では駄目なのである。

——フランスの学生たちは、「Hou-chia-chuang」の字を見せつけられて絶句した私を、しばらくは忍耐づよく眺めていたが、そのうちに「この東洋人は教養が全くないんじゃないやあるまいか」と言うような顔をして目くばせをはじめた。

そこで私は自己弁明のためにも、「同じ漢文でも」日本語読みと中国読みでは「音がちがうから」わからない、と言つた。言いながら、ある心配がないでもなかった。

案の定、学生の中にひとり、あたまの回転の早いのがいて、私の返事の終るのを待ちかねてこゝろ切りこんで来た。

「しかし、それは、地名人名に関する限り、変なことだ。たしかに、中国語と日本語は、ふたつのちがう言語なのだから、構造も発音も、同じ文字を使いながらもべつなのはなっとく出来る。

われわれヨーロッパ人だって、ローマ字アルファベットと言う同じ文字を使っているが、じゃあ、同じアルファベットを使うから、フランス人には自動的にドイツ語が読めてわかるかと言えば、飛んでもないことだ。しかし地名や人名となつて来ると、丸きり音をちがえておぼえてしまったのでは、日本人は中国の地理や歴史について、日本以外の土地で満足に話も出来ない、文も書けない、と言うことになる……」

その通り。

(もちろん、ローマ字の場合にも、Churchillと書いてフランス人はチャーチルと読まず、シュルシルと読んだりミシンで名高い「シンガー」をフランス流に「サンジュール」と読んだりするから、右の学生の言つたほどにかんたんではないが、しかし音としてシュルシルであつても、書体そのものはローマ字ひとつだから、Hou-chia-chuangの音のローマ字を日本人が耳にし、眼にして、ハテナと思うのとはちがうのである。)

回転の早いフランス人学生の図星どおり、何も、パリでの中国展の日を待たなくても、過去何十年か、アメリカでドイツでフランスで私はほとほと困りぬいたのである。(その結果は、ソルボンヌ大学東洋学部のある講師をたのみ、中国語——とくに音——の勉強をはじめている。二十歳のころ中国語をやつてかなりうまくなったが、もうすっかりさびつてしまったので。)(中国語の音をそのままローマ字にした英国版の中国地図や、歴史人名事典を買い、中国版のそれらももちろんそろえて、ふたつ首つびぎでしらべる面倒くさい勉強はとうにはじめた。)

何しろ、日本は中国と縁が深い。

美術、文学、思想、政治、歴史……欧米人のインテリと話をしていれば、いやとこちらが言ったって、中国のさまざまなことが話題に登場して来てしまうこと、屢々なのである。ほんとうにやりきれないのは、中国観としてはこちらの方が「正確だ」と思われる場合にも、欧米人のぶつけて来る人名や地名の「音」がわからないため、とかく、意見が出せずじまいなことである。

毛沢東マオツェトウなら、わかる。

香港ホンコンならわかる。

蔣介石チヤンカイシくらいならわかる。

が、ウーペイフが、呉佩孚とわかるまでにはかなりかかる。チェリン、とは何だろう。どんな字だろう。モタモタする。返事のしようはない。

「×××が亡くなったね。あの人の業績、どう思います？」日本には縁が深かったらしいが」などと聞かれたって、×××の音はチンブンカンブンで、いったい、どういう「文字の名」なのかわかりようもない。

私は過去に二度、日本の新聞社に申し入れをしたことがある。漢文で記す中国の人名・地名その他のルビをつけろ、と。

こんご日本は、東洋圏のさまざまなことについて、世界の多くの人々と、語りあってゆかねばならないのである。それなのに、おとなり中国の人名・地名その他について「自分だけのわかる、自分の音でだけ知って」いたのでは、そもそも、話など出来はしない。

「毛沢東主席」

こう書きはなしにしないで、

「毛沢東主席」
マオツェトウシ

とルビをつける。

「蘇州」

と書きはなさないで、

「蘇州」
スーチャウ

とルビを打ってくれ。

少々発音や音の抑揚がまちがったって、「音そのもの」が、ルビによって頭に入っていれば、それほど困らないのである。

ところが、新聞社の人々はこう言った。

「おっしゃることはよくわかるが、ルビは大へんわずらわしい。カッコに入れる手もあるが、それでは長くなりすぎる」

では、せめて雑誌や単行本だけでもと思うが、技術的な（右と同じ）理由で実現されない。

日本人はしたがって（中国語を勉強する人だけのぞいて）いつまでたっても、欧米の新聞などを読んで「ウー・ペイフの一九二〇年における行動は」などの文句にぶつかると、何もかもわからなくなってしまう事態からぬけ出せぬままなのである。有名な人の場合は顔写真が出るからまだいい。時には見当がつく。写真なしでやられた日には、全くお手上げになってしまう。

火急にこれは何とかしなければいけない。明日の発言権のためにも。

ところが、右に書いた意味での「大問題」については、実は向うさま——つまり中国語を国語とする側——も御同様、なのである。

親しいフランス人から面白い例を聞いた。これまた大分以前のことだが。

このフランス人は、仕事の関係で、中国人を多く知っている。欧米に住んでいる中国人ばかりでなく、本国にずっといて時々フランスにやって来る中国人とつきあいが多く。

あるとき——それは日本の田中総理の訪中の前であった——このフランス人は、知りあった中国の人にこう聞いた。

「タナカが行くね。どう思う？」

日本の総理大臣のタナカと言えばよかった。しかし、フランス人は何の他意なく、会話のついでにただ、タナカとだけ言ったのである。相手にはピンと通じなかった。しばらく考えてそれは何国人で商売は何かと聞いてから、

「ああ、デェン・チュン、ね」

時の総理くらいになれば、英文（仏・独等々）の新聞に名が書かれて、その場合は、日本語の音で「TANAKA」と書かれる。しかし、このローマ字のタナカと、日本文字での田中とは、決して一緒に書かれはしない。また「田中」と漢文で記される中国の新聞をだけ読んでいる中国人一般は、田中を「デエン・チュン」とのみ読むのであって、タナカとは読まない。したがって、何の前置もなく、「タナカが行くね」と言われても、「行く」からには人間で、場所ではないとだけわかって、さあ、だれなのか、ピンと来ない。タナカとデエン・チュンは彼の頭の中でひとつにならない。

私は一九四一年ごろ、南京政府の顧問であった父と一緒に、しばらく上海のフランス租界に住んだことがある。中国語は少々わかるようになっていたが、たれも、自分の名前を「単語として」勉強はしないから、ある日（上海に着いて早々）大失敗をした。

電話がかかって来て、（父は不在であった。彼の中国語は仲々うまかった）出てみると相手はこう言った。

「もしもし、チュワンヤンシャオツエ ツァイフイイチヤ
ウエィウエィ 在不在家」

「番号がちがっています。チュワンヤンシャオツエはここにはいらつしません」

「どうも失礼」

で電話は切れた。

が、またすぐかかって来た。同じ声が、同じことをくりかえした。